

# 須 恵 器 に つ い て

45期生

## I テーマ設定の理由

私の家の周辺から多量に土器が出土する。この土器の名は何なのか、又、どうしてこの辺一帯から出土するのか、それは小学生の頃からの私の疑問だった。それで、この機会にそれらの事を詳しく調べてみようと思い、このテーマを選んだ。

## II 研究方法

- (1)身近な所から調べてわかってきた事から発展させ、予想に基づいて現地調査をする。
- (2)図書館の資料で現地調査の結果を裏付ける。
- (3)資料館の方々にお話をうかがい、研究中に起こった疑問等を解決する。

## III 研究内容

### 1 陶器千塚

#### (1)陶器千塚

私の家の周辺つまり、堺市南部の丘陵地帯に広がる古墳群である。田や畑の中にはこっと盛り上がった竹やぶが点在するが、この竹やぶこそ須恵工人の墓、一説では地方豪族の墓とも言われる陶器千塚である。

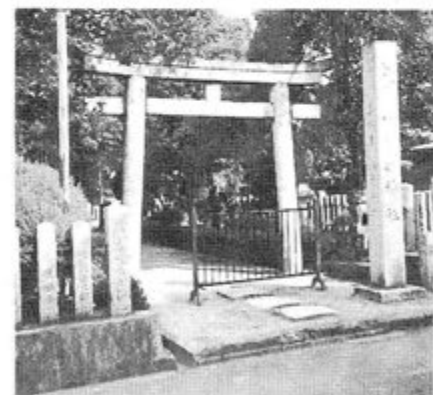
そして、この研究を始めるきっかけとなったのが、周囲の田から出土する多量の土器である。私も出土した土器の一つ持っているが、どう見ても陶器には見えない。でも陶器千塚、なのだ。これを解くカギが少しでも見つかるかと近くの神社へ行った。

#### (2)陶 荒田神社

この神社は延喜式に掲載されている。

上の名称を見て何かおかしい、と感じなかったか。陶と荒田が離れている。なぜなのだろう、そして荒田とは何なのか。神主さんにうかがうことにした。すると、荒田とは本名が荒田直と言う人物の名だと教えて下さった。何でもこの神社の祭神の一人、ツルギネノミコトを先祖に持ち、神社を正式に建立した人らしい。

陶とは陶器生産の中心地であったこの周りのことを昔、陶邑と言ったことからその陶をつけたようだ。が、人名と地名なので正式には離して書くという。だが、どうして陶器なのかという疑問は解けなかった。それで郷土資料を調べてみることにした。



▲写真1 陶 荒田神社

(3)資料

神社で得た唯一の手がかり“陶邑”から調べてみた。一番深く交わりのある歴史書は「日本書紀」だった。下のはそれらをぬき出したものである。

▶由是、天皇詔大伴大中、命東漢直掬、以新漢陶部高貴（略）還居千上桃原・下桃原・真神原三所。（後略）

▶布告天下求大田田根子、即於茅渟県陶邑得大田田根子而之。（後略）

内容を大体言うと、「百済から新しく陶部・他の工人らが天皇に貢がれ、桃原などに住みついた」、「大田田根子命が勅命により、茅渟県陶邑へ行く」

※注 { 茅渟県とは陶邑の辺りのこと  
          } である。

—結果—

陶器千塚は“陶邑古窯跡群”に含まれる。

大田田根子命〈陶 荒田神社祭神の一人〉と陶邑とつながりがあった。

陶器と表しているのは「陶質土器」だから。

陶質工器とは今で言う須恵器である。

須恵器は朝鮮から渡来して来た。

以上、五つの事がわかった。

2 陶邑古窯跡群

史実にあるように、実際渡来人の人々が須恵器を作る技術を伝えたようだ。これは桃原というのがどこにあったかを証明する手がかりになるので考古学者の中でも結構注目されている。（桃原の場所はわかっていない）そして須恵器の守り神であった陶 荒田神社が、ほぼ中心に作られたと思われる。つまり日本最古の須恵器生産地であったのだ。

初期の陶邑は、全国でただ一つの須恵器生産地として、又、中期はいくつかの生産地の中核的な役割を果たして栄える。しかし、粘土の不足や燃料の不足等によってどんどん生産量は減って行った。ついには東海地方にトップの座を奪われ、十世紀後半、廃絶してしまったのである。



▲写真2 行基像

3 高倉寺

(1)行基

須恵器について調べるうちに行基焼という名が出て来た。しかし、これは、行基が民の生活（須恵工人とも）深く関わっていたから着いただけであり関係なかった。

(2)高倉寺と行基

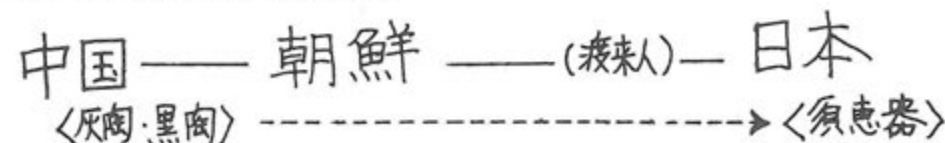
これは高倉寺の正式名称が大修恵山高倉寺と言う事からつき止めた事なのだが、高倉寺は行基が開いたという。勅命により、自作の薬師尊像を安置したのが始まりである。しかし、須恵器との関連性は余り無いようだった。

4 須恵器伝来

(1)発生地

正確にどこ、と言うことは出来ない。が、かなり昔から中国で作られていた。

中国で言う、いわゆる灰陶である。しかし、素地を炭化させて黒くしたものなら、紀元前二千年頃からあったらしい。

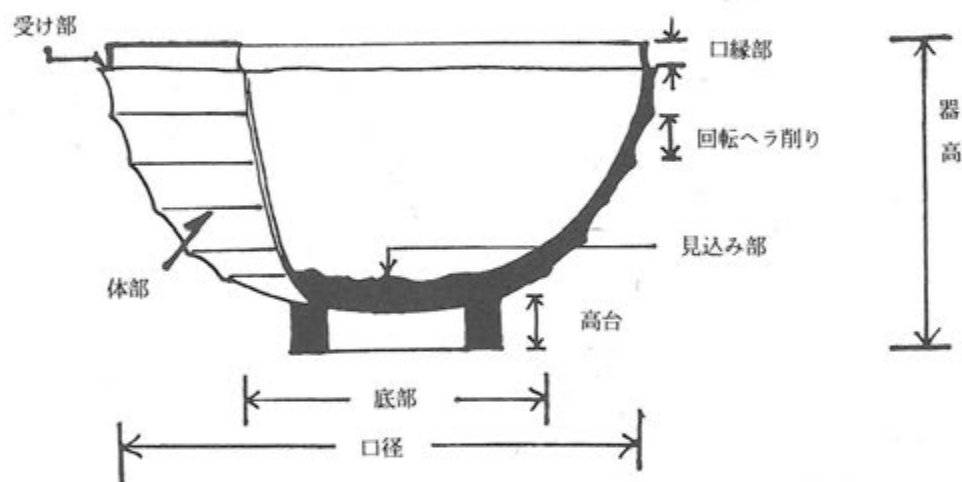


▲図1 渡来の道すじ

陶質土器 日本国外で作ったもの  これによって名称がつけられている。  
須恵器 日本国内で作ったもの  が、初期は技術が朝鮮などとほとんど変わらないため、輸入か、日本で作ったかわからず、行ったり来たりをくり返す事も多い。又、初期は渡来人が作っていたというのもややこしくしていると言える。

5 須恵器

(1)各部名称



▲図2 各部名称

(2)作り方

- ・粘土ひもを作る
  - ・粘土ひもをつぼや皿の形に巻き上げる
  - ・ろくろを使い、ひもを綺麗にならす
  - ・へらで磨く
- が一般的である。



ところが例外もある。図3くらいの大きさのつぼだと、ろくろを使うことが出来ないのだ。  
図  そう言う場合は、図4のような当て具と呼ばれる道具で引きのばしたり、たたき締めたりしていた。



▲図4 当て具とたたき板

### (3) 窯の造り

なだらかな丘の中腹あたりに、こういう穴を掘り、使っていた。こういう様式の窯を「登り窯」と呼んでいる。朝鮮から伝わったので今でも朝鮮に窯跡がある。

①灰原・物原=灰や失敗作を捨てた場所

②煙道(空気にふれない様工夫)

③燃焼部=火を燃やす所

④焼成部=作品を並べて焼き上げた所

⑤穴(煙を出す)

### 6 須恵器の変遷

須恵器は、その作られた時代や特色により、五つの型、更に数段階まで細かく分類することができる。

(1) I 型式 〈五世紀中頃～六世紀初め〉

形状や製作技法が朝鮮半島の物とよく似た物が多い。I 型式を通じ須恵器の日本化が見られ、工人達が組織統一されていったことがうかがえる。よく調整されている。

(2) II 型式 〈六世紀前葉～七世紀初め〉

需要が高まった。それで量産化を図ったが、そのかわり製作工程が省かれて行く。この時期の後半、各地で群集墳が作られ、副葬品として須恵器が多量に生産され、須恵器生産ピークを迎える。形は儀器化して行く。

(3) III 型式 〈七世紀前葉～七世紀後葉〉

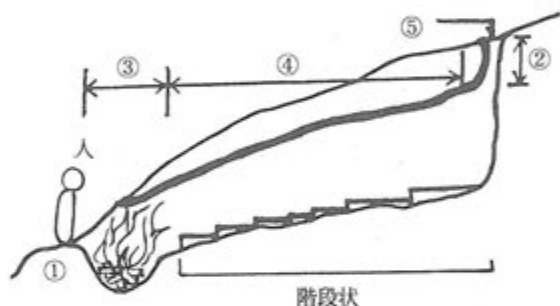
儀器化の一途をたどっていた器種が減少し、かわって宮廷で使用される供膳用の器種が出現する。また、蓋杯と身が逆転して蓋の中央に宝珠のようなつまみが付くようになる。量産化のため作りは少し粗雑になってくる。

### 〈ろくろ〉

当時は、足ふみでもなく、もちろんモーターとかでもなかった。けりろくろを使用。だから、先程の図3の様な大きな物は、ろくろで作ることができなかった。(足が届かない)

↓  
当て具やたたき板で作る。(初期のころは全部これだった)

だから、ろくろが出たから良くなったのは、同じ形の物ができる事だけで、スピード等はあまり変わらなかったのではないかと思う。



▲図5

→この焼き方だと還元状態(密閉)が作れる。登り窯により千度以上の高温で焼く事が出来るようになった。(今まで八百度くらい)

(4) IV 型式 〈七世紀末葉～八世紀末葉〉

この頃が須恵期最後の盛期である。だから器種が豊富で、新たに仏教具やへら磨きにより金属器を真似たりした物が出現する。当時、最大の消費地であった平城京が近くにあった事が陶邑に活況をもたらしていた。

(5) V 型式 〈九世紀前葉～十世紀〉

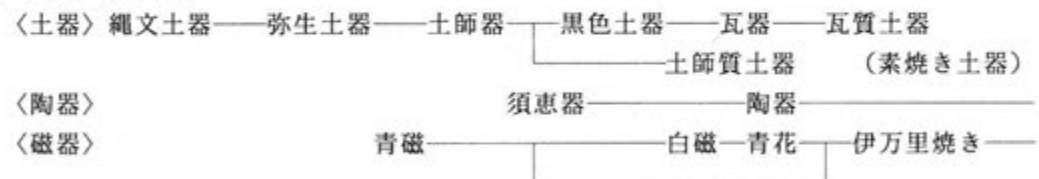
ろくろの高速度回転を利用して、糸切りによる製作台からの切り離しが行われるようになる。これによって椀・皿・瓶子などシンプルな小形の作品が増える。しかし、燃料、陶土の不足が次第に起こって来て、製品の供給圏が縮小して行き、十世紀後半に陶邑は断絶する。

### 7 遺物を残す努力

こうして調べた陶器千塚も、すでに四百基程の窯跡が泉北ニュータウンの開発で失われてしまっている。実際に、研究をしてみたが、結局窯跡の実物を一度も見ることができなかった。そして今も、着々と開発計画は立てられ、実行に移されている。本当にこれでいいのだろうか。こういう時、きっとだれもがこう思っているのではないだろうか。でも全く進展を見せていないというのも又、事実だと思う。そうした今、私たちが全く無関心になってしまった遺跡保存を、懸命に唱えているのは、わずかに心ある人達と考古学者くらいなのではないか。心の隅に少し良心が針をさしても、楽しさにとらわれてしまい、そんな事を忘れてしまったり、感じない。それが今の私達だと思う。

遺跡は考古学者だけの物ではない。みんなの物、そしてみんなで守って行かねばならない物だと思う。少しずつそういう「心」を取り戻したいと思わないだろうか。

### IV 結論(まとめ)



・素焼きの事を野焼きとも言う。穴を掘りたきぎを上にごっしりかぶせて焼く。

(八百度)

・登り窯で還元炎で焼く。(千度以上)

焼き物は、千度以上で焼かないと水に弱い。須恵器の時代に千度以上にして焼くという技術によって生まれた須恵器は、火にこそ弱い、かたくて水に強いグレモノだったのである。

### V 総括(反省・感想)

私はこの研究をしてみて、最初も最後まで何だかぐちゃぐちゃしていたが、色々やってみた事や予想した事にすごく満足感を覚えている。なんだか変な方向へ予想を立ててみて、思いがけない物を発見したり、何もなかったり、ここには書けなかった色々な事

を体験した。肝心な事を忘れて、予備知識を詰め込んだりしたが、それはそれで、本当にいろんな事をしたという事ですごく充実した気分である。だが、その満足感、この充実感の裏には、多くの人の協力があつた。

講習会等の忙しい合間をぬって、私のまどろっこしい質問に丁寧に答えて下さった資料館の方、須恵器の本をさがすのを一時間も手伝って下さった図書館の方々。そして忘れてはならない、家族。神主さん、住職さん、近所の方。そういう人達の協力があつたので私は研究を終える事が出来た。一年生の夏をこんなすばらしい夏にして下さった皆さんに感謝している。

少し内容が物足りない所もあり、少々ずれた考えを押し付けて書いた箇所等、出来てしまったが、なんとか終える事ができてとてもよかったと思う。

#### VI 参考文献

- 中村 浩／著 『古墳文化の風景』雄山閣出版（1988年）  
中村 浩／著 『和泉陶邑窯の研究』  
森 造一／著 『日本の遺跡発掘物語』「6 古墳時代」（1984年）  
石部 正志／著 『大阪の古墳』松籟社（1981年）  
小山富士夫／著 『日本の陶磁』中央公論芸術出版（1967年）  
末永 雅雄／監修 『きみたちの考古学』有斐閣（1986年）  
村井 嵩雄  
望月 幹夫  
松尾 昌彦／著 『古墳の知識』「II 出土品」東京美術（1988年）  
大谷女子大学資料館／編集 『陶質土器の国際交流』柏書房（1989年）  
森 造一／著 『古墳』  
  
堺市教育委員会 『昭和58年度国庫補助事業発掘報告書』（1984年）  
堺市教育委員会 『昭和59年度国庫補助事業発掘報告書』（1985年）